

第1回学校運営協議会会議録

開催日時	令和5年7月7日（金） 10時00分 ～ 11時30分
会 場	北海道北斗高等支援学校福祉実習室
出席者数	13名
内容	
1 委員紹介及び委嘱状の交付 2 説明・協議 (1) 学校運営協議会の趣旨 (2) 令和5年度(2023年度)学校経営の概要 (3) いじめ防止基本方針 (4) 今年度の予定 3 意見交流「地域が学校に求めていること」 ・旗の波運動に参加いただいた。町内会のイベント等に参加し、地域への障がい理解を進めることは重要である。 ・北斗市の小・中学校における特別支援学級在籍児童生徒数は、年々増えているため、本校の役割は重要である。 ・北斗市としては人口減少が課題となっており、人口流出を少しでも防ぎたいと考えている。そこで、北斗市における企業説明会を開催し、実習先を増やす取組を推進する予定である。 ・地域との関わりについて、実習中の看板設置を提案したが、どうなったか。 →・助言をいただき、学校名を入れた看板を作成し、設置している。 ・中野通町内会としては、8月5日に夏まつりを開催する。このようなイベントへの参加は地域との関わりにつながるものである。どんなことに参加が可能かを知りたい。 ・広報誌や新聞等で、本校はアピールしている。 ・北斗市高校生ボランティアに関わっているが、学校を越えた取組がなされている。インクルーシブについては国連の勧告もあり、本校と上磯との取組はアピールするに値する。 ・コロナ禍もあり、当法人の保育園でのデュアル実習が実施できてない。 ・進路については、本校は一般就労が多い現状があり、法人としてどのように関わっていくか教えてほしい。 ・本校の取組は広報誌等で周知したいと考えている。 ・本校の取組が少しでも周知できればと思い、広報誌に記事を掲載したが、当会はボランティアがメインで、教育活動とは異なる現状がある。 ・地域が学校に求めることはないと考えている。今後は、障がいのある人が普通に人間らしく生活できるようにする必要があるため、積極的に行動することが重要である。 ・地域の人々が学校を知らない現状については、実習ではなく、ボランティア的なものを取り入れる必要がある。 ・少子高齢化が顕著である。都市部に労働力が流出しており、地域で力を発揮する人材の育成が急務である。人との関わりについて経験不足な若者が多い。 ・単置と併置の違いなど、学校の機能を知らない人が多い。 ・保護者の障がい理解が進んできた。「障害者雇用」の方々には慣れた頃に課題が出てくるため、卒後支援とジョブコーチの存在は重要であり、在校時との比較等、本人保護者との共通理解の面を学校で担ってもらえるとありがたい。 ・本校の実習等の取組は、広報誌で紹介しており、利用者が学校を知る機会となっている。 ・本校の生徒はおとなしい。個性が消失していくことを懸念している。 ・学校の周知については、町内会のまつりなどに積極的に参加し、存在をPRする必要がある。 ・学校に求めたいことは、元気をもらいたいということ。そのためには、生徒が笑顔で活動することが重要である。 ・卒業生の就労状況について、成果と課題を明らかにすることが望ましい。卒業生から話を聞く機会を設けるなど、卒業生の活用は有効である。 ・在校生がどのような意思で一般就労を目指しているか知りたい。それを基に採用につながるとよい。学校とも協力し、「障害者雇用」を進めたいと考えている。 ・北斗市夏まつりに両校で参加する。行事の交流は行っているが、今後どう深めるか、両校の生徒会で検討する必要がある。 ・取組の周知は学校の命題であるが、個人情報の取扱い等の手続きから、即時性が薄れてしまう。バランスを見ながら取り組んでいく。 ・我が子の就職が目の前に迫ってきている。学校段階では、障がいのある子どもが同じ教室で学び、自然なサポートが	

あるが、社会に出ると難しくなる。特性の説明を本人ができるよう、発信する力を付けさせたい。

- ・ジョブコーチの重要性はとても高い。道南は少ないと聞いているので、ぜひ増やしてほしい。

4 その他

- ・当法人では、就職面接に保護者が同席することになっている。家族が困り感を日常的に話せる場が少ないと感じている。PTA活動を充実させることが重要である。
- ・PTA活動については、子どものゴールは自立であり、保護者は同じ悩みを抱えている。集まって話す機会を実現させたい。
- ・卒業生の保護者と在校生の保護者の茶話会は有効である。また、中学生の保護者は進路決定に迷っているため、有益な情報を提供する場も検討してほしい。

5 まとめ

- ・障がいがあっても社会で活躍できる人材を育てる必要がある。そのためには、教育課程上では限界があり、学校の教育活動以外で、ボランティアとして社会に貢献するなどの取組が重要である。この取組は今後の共生社会の実現にもつながるものである。生徒が地域の人たちでは手が回らないところに社会貢献し、「この学校がないと地域が困る」という存在になってほしい。
- ・教員が「働く」ことを教えることは難しい。学校では、「社会で生きる力」を育むことに力を注いでほしい。学校が「働く」ことを教える際は、就労先の方や卒業生を講師として招き、大変なことや楽しいことなど、現実的な話をしてもらう場をつくることも1つの方法である。
- ・仕事に直結する資格の取得も大事ではあるが、教えることができると、社会生活をしていくときの自己実現の1つになることが期待されるため、「自己実現に向けた資格」の取得も意欲的に取り組んでほしい。
- ・本協議会の委員は多様な方たちから構成されている。例えば、印刷物を本校に依頼し、本校の名称を入れて配付するなど、ぜひ本校の宣伝をお願いしたい。

6 校長から

- ・今回、「学校に求めること」という問いかけをした。「求める」ことは一方通行であり、双方向で何ができるか、お互い一緒に何ができるかについて模索することで、生徒の成長につなげていきたい。

上記のとおり会議を実施した。

令和5年7月7日 北海道北斗高等支援学校長 澤 田 崇 史 ㊞